

# 平成27年度第12回定例会

## 八王子市教育委員会議事録（公開）

日 時 平成27年10月28日（水） 午前9時  
場 所 八王子市役所 議会棟4階 第3・第4委員会室

# 第12回定例会議事日程

1 日 時 平成27年10月28日（水）午前9時

2 場 所 八王子市役所 議会棟4階 第3・第4委員会室

## 3 会議に付すべき事件

第1 第30号議案 八王子市立学校教職員の処置の内申について

第2 第31号議案 高齢者叙勲候補者の推薦について

第3 第32号議案 平成28年度八王子市一般会計予算の調製依頼について

第4 第33号議案 八王子市体育館条例の一部を改正する条例の設定依頼について

第5 第34号議案 八王子市立東浅川小学校校舎増築工事に関する議案の調製依頼について

第6 第35号議案 八王子市甲の原体育館の指定管理者の指定に関する議案の調製依頼について

## 4 報告事項

・平成27年度全国学力・学習状況調査の結果等について (指導課)

・平成27年市政世論調査「家庭教育」の結果について

(生涯学習政策課)

その他報告

出席者

教 育 長	坂 倉 仁
教育長職務代理者	和 田 孝
委 員	星 山 麻 木
委 員	輿 水 かおり
委 員	村 松 直 和

教育委員会事務局出席者

学 校 教 育 部 長	廣 瀬 勉
学校教育部指導担当部長	山 下 久 也
教 育 総 務 課 長	小 林 順 一
学 校 教 育 政 策 課 長	小 俣 勇 人
施 設 管 理 課 長	岡 功 英
保 健 給 食 課 長	野 田 明 美
教 育 支 援 課 長	穴 井 由美子
指 導 課 長	中 村 東洋治
教 職 員 課 長	廣 瀬 和 宏
統 括 指 導 主 事	佐 藤 晴 美
統 括 指 導 主 事	斉 藤 郁 央
生涯学習スポーツ部長	小 柳 悟
生涯学習政策課長	井 上 茂
ス ポ ー ツ 振 興 課 長	坂 口 崇 文
ス ポ ー ツ 施 設 管 理 課 長	橋 本 徹
学 習 支 援 課 長	新 井 雅 人
文 化 財 課 長	中 正 由 紀
こ ども 科 学 館 長	牛 山 清 志
図 書 館 部 長	小 坂 光 男
中 央 図 書 館 長	中 村 照 雄
生涯学習センター図書館長	新 堀 信 晃
南 大 沢 図 書 館 長	村 田 浩 三

川 口 図 書 館 長  
指 導 課 指 導 主 事  
指 導 課 指 導 主 事  
生 涯 学 習 政 策 課 主 査  
教 育 総 務 課 主 査  
教 育 総 務 課 主 事  
教 育 総 務 課 嘱 託 員

福 島 義 文  
野 村 洋 介  
上 野 和 弘  
塩 澤 宏 幸  
堀 川 悟  
廣 瀬 桃 子  
村 尾 ひとみ

【午前9時00分開会】

○坂倉教育長 大変お待たせいたしました。本日の出席は5名全員でありますので、本日の委員会は有効に成立いたしております。

これより平成27年度第12回定例会を開会いたします。

いつも申し上げておりますが、本市では、地球温暖化対策、省資源対策の一環として、節電等に取り組んでおります。本定例会においても、照明の一部消灯等に対応させていただいております。

クールビズについては今回で終わりますが、またウォームビズ等も含め、今後とも対応してまいりますので、御理解いただきますようお願いいたします。

日程に入ります前に、本日の議事録署名員の指名をいたします。

本日の議事録署名員は、和田孝委員を指名いたしますので、よろしくお願いたします。

なお、議事日程中、第30号議案から第31号議案は個人情報を含むため、また、第32号議案から第35号議案はいまだ意思形成過程のため、「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」第14条第7項及び第8項の規定により、非公開といたしたいと思いますが、御異議ございませんでしょうか。

〔「異議なし」と呼ぶ者あり〕

○坂倉教育長 御異議ないものと認めます。

-----◇-----

○坂倉教育長 それでは、それ以外の日程について進行いたします。

報告事項です。指導課から報告をお願いしたいと思います。

○斉藤統括指導主事 それでは、平成27年度全国学力・学習状況調査の結果等について、報告いたします。

こちらは、平成27年4月21日火曜日に実施された調査について、本市の結果を報告するものでございます。

詳細につきましては、上野指導主事から御説明いたします。

○上野指導課指導主事 それでは、御説明いたします。

まず、1ページを御覧ください。I、調査の概要についてです。

全国学力・学習状況調査につきましては、小学校第6学年、中学校第3学年の、原則として全児童・生徒を対象に、平成27年4月21日火曜日に実施されました。

本年度につきましては、小学校・中学校ともに理科に関する調査が全児童・生徒対象で初めて実施されております。

2 ページを御覧ください。Ⅱ、教科に関する調査の結果です。

正答の状況を平均正答率で示してあります。小学校は、国語Aが全国平均を0.1ポイント上回っていますが、他の調査は0.3ポイントから2.8ポイントほど全国平均を下回っています。中学校では、理科が全国平均を1.6ポイントほど下回っておりますが、他の調査は全国平均を1.1ポイントから2.3ポイントほど上回っております。

3 ページから8 ページまでのグラフは、正答率分布となっております。

また、9 ページから14 ページまでは、分類・区分別集計結果となっております。詳細につきましては、後ほど御確認ください。

それでは、26 ページをお開きください。26 ページから42 ページまでは、児童・生徒質問紙調査の結果です。28 ページを御覧ください。

国語において、「授業で目的に応じて資料を読み、自分の考えを話したり、書いたりしていますか」の質問に対して、肯定的な回答をしている小学校児童、中学校生徒の割合は、前年度の割合を上回っております。

また、中学校において、「授業で意見などを発表するとき、うまく伝わるように話の組み立てを工夫していますか」において、「工夫している」と答えた平成27年度の生徒の割合は62%となっており、平成26年度と比べて約7ポイント上回っております。

また、「授業で自分の考えを書くとき、考えの理由が分かるように気を付けて書いていますか」の質問についても同様に、約8ポイント上回っております。

次に、29 ページを御覧ください。

「読書は好きですか」の質問に、「当てはまる」と答えた小学校児童の国語Bの平均正答率は69.4%で、「当てはまらない」と答えた児童より約2.1ポイント上回っております。同じく、「読書は好きですか」の質問に「当てはまる」と答えた中学校生徒の国語Bの平均正答率は71.6%で、「当てはまらない」と答えた生徒より約1.4ポイント上回っております。

このことから、読書習慣の定着は、国語の学力向上を図る上で大切であると考えられます。

次に、30ページを御覧ください。

算数・数学において、「授業で問題の解きかたや考えかたが分かるようにノートに書いていますか」の質問に「当てはまる」と答えた小学校児童の算数Bの平均正答率は46.6%で、「当てはまらない」と答えた児童より約19ポイント上回っております。

同様の質問に「当てはまる」と答えた中学校生徒の数学Bの平均正答率は46%で、「当てはまらない」と答えた生徒より約11ポイント上回っております。

このことから、算数・数学の授業において、思考力、表現力を高めるために、ノート指導は重要な役割を果たしていると考えられます。

次に、32ページ、33ページを御覧ください。

理科において、小学校5年生までに受けた授業で、「自分の考えや考察をまわりの人に説明したり発表したりできていますか」の質問に、「当てはまる」と答えた小学校児童の理科の平均正答率は64.2%で、「当てはまらない」と答えた児童より約22ポイント上回っております。

また、中学校1年生、2年生までに受けた授業で、「自分の考えや考察をまわりの人に説明したり発表したりできていますか」の質問に、「当てはまる」と答えた中学校生徒の理科の平均正答率は54.3%で、「当てはまらない」と答えた生徒より約22ポイント上回っております。

このことから、理科の授業において、観察や実験の際に自分の予想をもとに計画を立てたり、自分の考えや考察を周りの人に説明したり発表したりする活動は重要であると考えられます。

次に、34ページを御覧ください。

「授業のはじめに、目標（めあて・ねらい）が示されている」と回答した小学校児童は約87%、中学校生徒は約75%で、小学校と中学校に大きな差が見られました。「本時のめあてが示されているか」の質問に「当てはまる」と答えた小学校児童の国語Bの平均正答率は74%で、「当てはまらない」と答えた児童より約20ポイント上回っております。

同様に、「本時のめあてが示されているか」の質問に「当てはまる」と答えた中学校生徒の国語Bの平均正答率は68%で、「当てはまらない」と答えた生徒より約27ポイント上回っております。

このことから、授業の導入時に、本時のねらいを明確にした授業の実施が大切であると考えます。

次に、学習習慣の面から御説明いたします。35ページをお開きください。

「家で学校の宿題をしている」と回答した小学校児童は96%と、平成26年度と同じ割合でした。また、「家で学校の宿題をしている」の質問に「当てはまる」と答えた小学校児童の国語Bの平均正答率は44.8%で、「当てはまらない」と答えた児童に比べ、約22ポイント上回っていました。

同様に、「家で学校の宿題をしている」の質問に「当てはまる」と答えた中学校生徒の国語Bの平均正答率は47.6%で、「当てはまらない」と答えた生徒に比べ約17ポイント上回っていました。

このことから、家庭学習や学習習慣の定着を進めていくことが重要であると考えます。

続いて43ページを御覧ください。

43ページ、44ページにつきましては、今年度から新たに、本市における教育施策と学力との関連について掲載いたしました。

1つ目は「小中一貫校に見られた学力向上の取組」、2つ目は「地域運営学校に見られた学力向上の取組」、3つ目は「アシスタントティーチャー配置校に見られた学力向上の取組」、4つ目は「学校図書館サポーター（現学校司書）配置校に見られた学力向上の取組」、以上の4点について御説明いたします。

なお、分析に用いております標準化得点とは、国立教育政策研究所が出力しております数式をもとに、各年度の調査の平均正答数から総体的な比較を行い算出された得点になっており、全国の平均正答数が100となっております。

では、1つ目です。小中一貫校の事例ですが、学力向上に向けた取組として、算数・数学の授業において、中学校の教員が小学校に、小学校の教員が中学校に出向き、算数・数学の習熟度の低いグループの授業を中心に配置することで、支援が必要な児童に対して個に応じた支援を行っております。そのほかの教科においても、年間のカリキュラムを作成し、教員間の交流を通して、実験・観察のサポート、実技のサポート等を行っております。

また、児童・生徒間の取組として、中学校1年生の全生徒が小学校の全学年、全学級に対して読み聞かせ活動を行っております。このように、小中学校9年間を見

通した多くの取組を通して、児童・生徒一人ひとりの学力向上を図っております。

2つ目は、小学校の地域運営学校の事例ですが、学校運営協議会が毎週水曜日にボランティアを募集し、定期的に放課後算数教室を実施することで、一人ひとりの児童の実態に応じた学力向上の取組を実施しており、3年間の変化を見ると学力が向上しております。

中学校の事例においては、学校運営協議会と連携し、毎週月曜日の放課後補習教室、定期考査前の自主学習教室、各種検定のサポートを行うことで、一人ひとりの生徒の実態に応じた学力向上の取組を実施しております。小学校と同様、3年間を通した変化を見ると、学力は向上しております。

ここに挙げた小中学校以外の地域運営学校においても、地域と連携した学力向上の取組を実施している学校においては、学力が向上している傾向が確認できております。

44ページを御覧ください。

アシスタントティーチャー配置校である小学校の事例ですが、アシスタントティーチャーを算数の習熟度の低いグループを中心に配置し、支援が必要な児童に対してノート指導、助言といった個に応じた支援を行っており、全ての教科において学力が向上しております。

中学校の事例では、アシスタントティーチャーは国語、社会、数学、理科、英語の5教科の授業に配置し、支援が必要な生徒に対し、ノート指導、助言といった個に応じた支援を行っており、全ての教科で学力が向上しております。

以上の学校以外のアシスタントティーチャー配置校においても、支援が必要な児童・生徒に対して継続的な支援を行うことで、学力が向上している学校が多く見られます。

このことから、学力向上が急務となっている学校では、アシスタントティーチャーの配置が学力向上において非常に有効であると言えます。

4つ目は、学校図書館サポーター、現在の学校司書配置校の小学校の事例ですが、学校図書館サポーターが、各教科等の授業において資料を活用した授業を行う際に、児童に対しては資料選択の助言を行っております。また、教員に対しては、授業で活用できる図書の紹介を行っております。

そのほかにも、全学年、全学級において読み聞かせ活動を行っております。国語

A、国語Bのグラフからも確認できるように、国語の学力が大幅に向上しております。

その他にも、この小学校では全学年、全学級において読み聞かせを行うことで、読書に関する興味・関心が高まり、学校図書館における本の貸出冊数が、3年間で約3倍に増加している結果も報告されております。

また、中学校の事例ですが、学校図書館サポーターが国語の授業において学校図書館を利用する際に、支援を行っております。3年間を通して高い学力を保っていますが、平成26年度調査から27年度調査にかけては、学力がさらに向上していることがわかります。

その他にも、こちらの中学校では、全学年、全学級において朝の学習の時間に英語の図書の読み聞かせを、昼休みには通常の読み聞かせ活動を行うことで、英語に関する興味・関心、読書に関する興味・関心を高めております。

学校図書館サポーター配置校として事例を挙げた小中学校以外の全ての配置校に聞き取り調査を行ったところ、全ての小中学校において、読書量が大幅に向上し、学習に対する興味・関心が高まっているとの回答をいただきました。

このことから学校図書館サポーターの配置が、学力向上において非常に有効であることがわかります。

それでは、45ページを御覧ください。

最後に、八王子市教育委員会の学力向上に関する今後の取組ですが、八王子市教育委員会・学校・家庭の連携した取組を充実し、児童・生徒の学習意欲を向上させることを目標に、学習習慣の定着を図っていくように取り組んでまいります。

そのためにも、校長会、副校長会等において、分析結果及び本市の課題を継続的に伝達し、資料改善及び指導法の改善、家庭との連携について指導を行ってまいります。

また、指導主事の学校訪問を継続して行い、学力に関するあらゆる調査の結果を分析した資料を学校に掲示し、具体的な指導・助言を通して、各学校の校内研究や研修を充実させるとともに、指導力パワーアップ研修等、各教科の研修会を充実させ、教員の授業力向上を図ってまいります。

これらの取組を通じて、今後も全ての児童・生徒の学力向上と定着の向上に努めてまいります。

私からの報告は以上になります。

○坂倉教育長　　ただいま、平成27年度全国学力・学習状況調査の結果等についての報告は終わりました。

本件について、御質疑はございませんでしょうか。

幾つか細かい点から入りますね。まずは、43ページ以降、これは退任なさった金山委員が、八王子市の施策との関係というのもぜひ分析してほしいということで、こうしてやってくれたので、本当に皆さんの努力を評価したいと思っています。

そう言うおいて、2ページなのですが、去年までは八王子市を、対全国、対東京都で比較したのだけれども、今年は全国に対して八王子市と東京都の比較になっていますよね。意図はわからないのだけれども、はっきり言って、ずるいなと思います。

東京都は今回7位くらいで、結構正答率が高いから、これと比較すると厳しいとは思いますが、東京都の平均からすると八王子市はみんなマイナスなんですよね。それは、こう書いてもわかることだし、八王子を知りたいのだから、東京都が全国よりどれだけ多いとかではなくて、東京都よりどのくらい低いかということを出さなければいけないと思います。比較の仕方は去年までのほうが正しいと思うので、ここは指摘した覚えがないのに変えたのは、余りフェアではないなと少し思いました。

それから、最後のところで、「八王子市教育委員会の取組」という言い方をしているけれども、これは八王子市教育委員会学校教育部指導課の取組ですよ。

43ページにあるようなこともやってくれたのに、どこにもそのことが出てきていなくて、復習とか予習とかその辺しか出てこないのだけれど、そこも少し触れたいと思うのだけれど、当然、先ほど言ったような小中一貫とか地域運営学校、それからアシスタントティーチャー、学校図書館サポーターが有効だったら、これらをより積極的にしていくということを出さなければいけないですよ。

指導課はそれでいいかもしれないけれども、一生懸命教育委員会全体としても、それから学校教育部としても、アシスタントティーチャー予算であるとか、図書館サポーター予算も別のところが取ろうとしているわけですよ。だけど、その効果が見えないんですよ。これは、教員の中から見ている課題でしかないのであって、やはりここに全く出てこないというのが、非常に不満です。指導主事さんは学校訪問

をしていて、それはよくわかっていますし、その努力は買いますが、そののところはもう少し考えてほしいと思っています。

内容的に見たときに、宿題をやらないというのは子どもの責任というか家庭の責任だとしても、例えばノートをとるのが有効だとか、事前に今日のめあてを示すのが有効だとか、もう言われてわかっていることなのだけれど、事前の目標の設定とかノートの取り方というのは、そこができていない教員が現実にいるのはわかるけれども、教員個々になったときに、有効でしたではなくて、それをどうするかというのは、もっと強く出さなければ。結果がわかっているのに、いつまでたってもやらない教員がいるのだったら、そのところは皆さんが学校に行ったときに強くこういうものを出して行って、そういう方に対しては厳しくやっていかないと意味がないと思うんですよね。

教科書採択のときに、私があえて「できれば変えたい」と言うのは、一部、毎年同じノートを使っているような教員がいて、これでは困りますよということを行っているのだけれど、その辺のところは、これだけ数字に出ているなら、もっと強く出してほしいのです。子どもに宿題をどうやらせるかと、これはまた考えなければいけないことだけれど、事前のめあてあたりは、こう見えましたというのではなくて、しっかりとした目標、「これでやりなさい」というあたりを、もうやっていると思いますが、もっと強く出してほしいと思いました。

それから、個別に入るのだけれども、八王子市の教育施策はよくやっていると書いてくれたのだけれど、全般的に見て、中学校の効果が余り現れていない気がします。小中一貫教育にしても、それから地域運営学校にしても、学校図書館サポーターにしても。その辺のところを、どう分析しているかというのも少し聞いてみたい気がするのですが、私が見る限りでは、特に学校司書の活用については、小学校のほうのはるかに進んでいて、中学校はまだいま一つ効果を感じていないなという気がするのです。これからは、どんどん校長に言おうと思っていますけれども、このH中学校ではそんなに効果が見えないのだけれど、もしあったのなら言ってほしい。

それと、小中一貫教育でいったときに、小学校のほうのメリットは大きい気がするけれど、中学校のメリットはなかなか……。小中一貫校になれば別なのだけれど、今のままの一貫教育の中で連携している中で、中学校の教師が小学校に入って5年生・6年生あたりに教えていく対応というのは、すごく効果はあると思うのだけれど

ど、小学校の教師が中学校に来るというところで、いま一つ効果が出ていないのかなという気がします。このあたりもどのように考えているのか。

その辺のところ、答えがあればお願いしたいと思います。

○上野指導課指導主事　まず、本市の教育施策等との連携のところにつきましては、学校教育全体で情報を共有し、指導課だけではなく、全課一致で取り組んでいければと考えております。そのために、指導課としても情報を他課にきちんと提供し、課題や成果等についても共有できればと考えております。

ノート指導、また本時のねらい等につきましては、私たちが学校訪問を行った際にも、非常に課題として感じております。指導主事は全校を訪問しておりますので、現在も訪問した際には、個別または学校長や管理職に指導をしておりますが、今後より一層、全教員に対して指導をしていきたいと考えております。

また、学校図書館サポーターの件につきましては、教育長がおっしゃったように、中学校の取組のほうは若干まだ低いのかなと感じております。現時点で、学校図書館サポーターは、小学校37校に対して中学校は7校という実績となっておりますが、このあたりにつきましても、今後増加していきますし、研修も行ってまいりますので、効果やこういう取組があるという事例も、その中で学校図書館サポーターや学校長等にもお伝えしたいと考えております。

小中一貫校の中学校側のメリットにつきましては、学校訪問をしておりますと、特に中1ギャップ、中学校1年生の数学の習熟度が低いクラスにおいて、特に支援が必要なお子さんに対し、小学校段階でかかわりのある先生がきめ細やかな指導で対応してくださるということで、個に応じた指導というところで成果が上がっているというお話は伺っております。

以上です。

○斉藤統括指導主事　小中一貫校のことについて、少し補足をさせていただきたいと思っております。

先ほど教育長からも御指摘があったとおり、私も学校を回っていて、特に中学校の教員に関して、めあての提示や、またノート指導について、少々足りないかなと感じることが多くあります。

小中一貫校では、そのあたりで共通の研究を行っていくことで、お互いの授業を見合ったりする効果というのも大きく寄与するところかと考えているところです。

今週末、館小中学校で研究発表がありますが、そういう研究発表を4校の小中一貫校で共有することによって、そういった効果というのも検証してみたいと思いますし、それを各中学校にも広めてみたいと考えております。

○坂倉教育長 後半が大事ですね。一貫校はそこそこやっていると思うんです。特に、校長先生が替わったところなんかは、それをどう判断するかは別として、実質的な教科担任制を入れてもいいかというような申請が出ていると思うのだけど。

一貫教育校に対して、一貫校で行っている取組をどのくらい伝えられるか。伝えていかないと、せいぜい一貫教育の日に行事を一緒にしているくらいですね、というような声を結構聞いたりもするので、物理的な距離だけではなく、特に中学校の校長先生の、一緒にやっついこうという意識なのではないかなと感じています。その辺も含めて、ぜひ、指導をしてほしいと思います。

斉藤統括指導主事は小学校籍なのだけれど、中学校籍の指導担当部長と統括はどうですか。

○山下学校教育部指導担当部長 小中一貫は、小学校から上がってくる子どもたちを中学校で見ていて、もっと早い段階から指導しなければという危機感を持ってやっついちゃる方も結構いらっしやいます。そういった意味では、要するに、最後は自分たちのところに返ってくるという認識、そこからスタートしていく部分もあります。その部分については、それぞれ校長先生方の考え方はさまざまなのですが、必要であるという認識はある。ただ、それをきちんとやれるかどうかというところが勝負だと思っているので、これに関しては個々に、そのあたりの話をしていく必要があるかなと思っています。

また、地域運営学校についても、小学校ですと、例えば見守りだとか放課後の活動とか、地域とのつながり方が、割とベースになる地域と学校と一緒にというイメージを出しやすいのですが、中学校になると、生活指導とか青少対とか、そういう絡みになってきて、なかなか地域運営学校というものをイメージとしてしっかり持てない校長先生も中にはいらっしやると思うので、そのあたり、それぞれの特性を踏まえた上で、きちんとやっていきたいと思います。

最終的には、やはり管理職である学校長の意識だと思っています。

○坂倉教育長 上野指導主事の説明の中で、小学校の授業をいま一つこなし切れなかった子どもが、小学校の先生が来てくれると細やかな指導ができるというのは、具体

的な例だったのだけれど、多分、中学校のほうはそのくらいにしか思っていないくて、あとのことは結局自分たちがやるしかないという意識がすごく強いと思うのです。もっと別のやり方、例えば読書などで言うと、小学校の先生が来たときに、中学校の生徒に読み聞かせをすとか、そのようなところでも使えると思うし、結構やり方があると思うのです。

例えば教科書が変わるときに、小学校は学校ごとに、例えばある学校は算数をやって、ある学校は国語をやって、お互いに持ち寄ると言うのだけれど、中学校は全部自分の学校で対応するという話を聞きました。いい意味での競争心はいいと思うのだけれど、できるものはぜひ使ってほしいという思いがあります。

また、地域運営学校にしても、名前は挙げられないけれども、例えばニュータウン方面のある学校とか、中心市街地のある学校なんかは、相当、漢検や英検、プラス補習に力を入れているのではないですか。その辺はここに出ていないのだけれど、使い方は幾らでもあると思うのです。これは私がいつも言っているのだけれど、何か自分たちでという意識はあるのだけれども、これからの時代、いじめや何かの問題、それからいわゆる健全教育も含めて、学校だけではできないし、それを先生方もわかっているとすれば、もっと地域の力を使っていくという意識が、図書室が開放されていないことを含めて、足りないのかなという気がします。

自負はいいけれど、もう少しいいことをどんどん生かしていくという意識は、ぜひ持ってほしいと思いました。

○興水委員 学力調査についてのまとめを、本当に細かくしていただいてありがとうございました。

ここで、一番学校にも言っていきたいことは、指導感を改善しなければ授業は改善しないと思います。今、求められている学力は何なのか。これからの時代をつくっていく子どもたちに求められている学力とは何なのか。大きく変わっているわけですから、今までの授業の流れの中だけでは、これは絶対クリアできないという危機意識がどれくらい学校にあるかというところが、何よりも大事だろうと思います。

数字に一喜一憂するのではなくて、何が求められているのか。これを、ぜひ指導していただきたいと思います。

それが一番わかるのは、学力調査の内容です。問題が、どのような思いで出されているのか。これを分析しないで数字だけであれこれ言っている、何年たっても

授業は変わらないし、もっと言えば、何年たっても子どもたちは必要な力を確保することはできないのではないかと、それを私は大変危惧しております。

この問題を見ていくと、本当に計算ができるとかできないだけ、漢字が読めるとか読めないだけを求めているのではないというのは明白だと思います。

A問題は基礎・基本とありますが、今回のA問題は、基礎・基本だけでは解けない問題がどんどん入ってきています。B問題が解ける子どもにしていかなければ、時代に対応した力はつかないという、この認識を学校が、現場が、授業者が持てるかどうか。そうしなければ、単にめあてを書くとか、単に振り返るとかというのでは困ると思うのですね。何のためにめあてを書くのかというのがなかったら、ただ書きましたで終わってしまってはどうしようもない。

それでも子どもたちは、めあてに書いてあることを意識するようになっていくし、その結果、学力も相関がある伸び方をしているとか、または、それをしない学校と比べると明らかに相関があるという結果が出ているわけですから、まずは一步踏み出せているとは思いますが、何のためにめあてが要るのか。何のために振り返りが要るのかというのがなければ、形式で終わってしまう。形式で終わったところに改善はないと思います。

ぜひ、指導主事の方は、各学校に行かれたときに、めあてを書くのは何のためなのか、振り返りをさせるのは何のためなのかということを考え、またそれがストレートに伝わるような御指導をお願いしたいと思います。

盛んに言われているのは、その一つひとつの知識を獲得させる、いわゆるコンテンツを重ねるだけでは、もうだめなんですよということが、この学力調査で問題からどんどん出てきているんですね。これを資質能力に高めるためには、どうしていけばいいのか。より専門的なことを、校長先生だけではなくて、ストレートに教職員に伝えていくことが必要ではないかと強く思います。

こんなに時代が変わっていく中ですので、ぜひ、その時代を読み、そして、変わる中でも子どもの人間性をしっかりとというところで、いろいろな施策を講じてほしいというふうに思います。

中学校がなかなか効果が出ないというお話がありました。盛んに言われているアクティブラーニングですが、一番それが発揮されているところというのは、子どもが、やりたい、やってみたいということを一番大事にしている、幼稚園教育だろう

と、私は思っていますが、小学校もそれをすごくやってきているわけですね。中学校で、それを学んでほしいと思います。

やはり、中学校の先生は教科別ですから、各教科の知識を子どもたちに、これは入試のせいもあります。出口があるから仕方がないとは言いながら、それをずっと積み重ねていくだけで、そのことがどういうふうに関係力や表現力につながっていくのかというところをやっていかなければ、小学校に学ぶことはない。知識があるならば、当然中学校のほうが小学校を土台にして高いものを教えるわけですから、当然それは学ぶことはないということになるかと思いますが、子どものやりたい気持ち、主体性を、どのように小学校や幼稚園が引き出そうとしているのかというところを、ぜひ学んでいただきたいし、そうすることで、中学校のこの数値は当然上がってくると思います。

もう一つ、地域運営学校ですが、すごく大切な要素だと思います。これをどう使うか。ここで見せていただくと、C小学校、D中学校では、それぞれ補習要員としてお使いのように見受けられます。もちろん、それもマンパワーとして、補習など、そういう学習に使うことはあるかと思いますが、今、地域運営学校、いわゆる協働学習で求められているのは、さまざまな立場にある方々からの、さまざまな経験や体験を聞くことだと、それに触れることだと思いますので、地域運営学校の運営が、よりB問題を解決していくような、そういう力に結びつくような運営となるよう、御指導いただけたらと思います。

以上です。

○斉藤統括指導主事　　以前、私は文部科学省の教科調査官から、B問題というのは一つの授業のモデルなんだという話を伺ったことがございます。

今年度、多くの指導主事が、各学校の校内研究の講師として呼んでいただいているのですが、今、指導資料をつくる際には、その学力調査の解説資料等をもとに資料をつくって、学校に説明をさせていただいているところがございます。

そのあたり、文部科学省が考えていることを、指導主事が具体的に校内研究の中で伝えることによって、学校のほうにも普及・啓発を図ってまいりたいと考えております。

めあて、それから振り返りというものが大事だということについても、単に、やっていないからということではなく、その意義を伝えていくことが大事だという委

員の御指摘は、全くそのとおりでございますので、私どもも学校訪問の際に、そのあたりを強調させていただきたいと思っております。

また、地域運営学校の件につきましても、今、指導主事が各地域運営学校の学校運営協議会に参加させていただいたりというようなことも行っておりますので、そのあたりの様子を見ながら、できるだけ、私どものほうから進め方についてお話しできることは伝えていきたいと考えております。

○興水委員　　もう1点。今、お話を伺って、大変心強い思いですが、学力調査問題について、どれくらいの教員が実際に自分で解いているのかということ、以前申し上げた覚えがございます。

一番近いと思っております。早道だと思っております。今、おっしゃったように、このB問題の中に授業改善の方向性が示されているというのであれば、教員全員が、これやってみる。45分あればすぐにできることですので、これをぜひお願いしたいと思っております。

○坂倉教育長　　その辺、調べてみているのですか。

○斉藤統括指導主事　　問題を解いているという実態については、正直把握はできておりませんが、私自身も学校に行くときに、実際に先生方に、この問題を解いてみましょうということやることがあるのですが、そのときに、「知らない」という顔をしている教員がたくさんいるので、やはり解いていない教員がいるというのは、間違いないところがございます。私ども指導主事が学校に行く際に、そのあたり、先生方にお話をさせていただきたいと考えております。

○村松委員　　先ほど、小中一貫のお話が出ていたのですが、小学生のほうは、先生にしても生徒にしても大分メリットがあるという話を聞きましたが、これは、私は逆に中学生のほうにメリットがあるのではないかと思います。

なぜかと言いますと、中学校1年生、2年生になると、年ごろになってきて、歳が下の子どもたちに接する機会というのは、なかなかないんですね。今は一人っ子の御家庭も多いです。そんな中、小学生という、自分より立場、または体や力が弱い者が、どういうふうにして、どういうふうにいるのかという、そういうことを意識する本当にかげがない時間だと思うんですね。

今回、このグラフや数字を見て、とても細かく示していただいて、本当に御苦労だったと思うのですが、小中一貫のことは、この数字とか形とかで目に見えない学

習だと思っています。ですから、中学生の子どもたちに、どんどんこういう読み聞かせや、いろいろなスポーツと一緒にやる、そういうことで目に見えない学習をもっと指導していくというか、やっていく場所を与えていけば、それこそ中学生が、弱い立場の者のことを考えるだとか、そういうことにつながっていくのではないかと私は思うのですが、今、この小中一貫の授業というのが、年に何回くらいあるのでしょうか。

○上野指導課指導主事　小中一貫の連携につきましては、基本、ベースとして学期に1回、年3回は必ず行うようにということで指導をしております。

なおかつ、2学期、10月第1水曜日につきましては、小中一貫の日ということで、必ず実施し、その状況をホームページ等にアップするというのも義務づけをしております。

○村松委員　ありがとうございます。ぜひ、先生方も大変勉強になると思いますし、小学生や中学生の子どもたちがまざり合って、そういう者の立場というのを考えられるような、そういう小中一貫教育を、八王子市はやっていっていただきたいということを、最近よく思います。

ぜひ、その辺のカリキュラムをよく考えていただいて、また、示していただければと思っています。以上です。

○佐藤統括指導主事　小中一貫教育につきましては、現在、見直しを図っているところでございます。その中で、先ほどもありましたが、やはり数字では見えない部分が教育に関しては多いのですが、今、推進委員の先生方と相談しているのは、なるべく数値目標をつくらうということを考えております。それを評価していくということも考えております。

また、授業につきましては、先ほど上野指導主事が話したとおり、年3回以上とさせていただきますが、それ以外にも、各中学校区ごとに、あいさつ運動を小学校と中学校が合同で行う、読み聞かせを行うという、よい取組をしている学校もあります。そういうものを全校に発信していきたいと考えております。

○坂倉教育長　恐らく、中学校は受験というものがあるので、そこに向かってどうしても意識がいつてしまう。それから、現実に指導要領もかなり厳しくなっていて、これからますます厳しくなってくる中で、今、村松委員のおっしゃった情緒の面だとか、興水委員のおっしゃったアクティブラーニングの面といったところに明らかに

効いていくのだけれど、まずその前に教え込むというあたりが、やはり頭に一番に来るのだと思うのです。

そういう意味では、本市でも少し考えていますが、義務教育学校のように、本当に一緒にしてしまわないとなかなか難しいところもあるのですが、お2人が言われたように、中学生に対しても、常識的な問題とか、考える力という意味でいったときに、効果が出てくるところもあるので、そこも含めて、ぜひやってほしいと思います。数値は数値でとても大事だと思いますが、多分言っている数値というのは、交流する回数とかだと思うのだけれど、内容が大事だと、奥水委員が言われたように、これから本当に自分で考えて社会に出ていく力というのが大事になってくるとすると、考える力というあたりを考えていく中では、保幼小連携もそうだけれども、異年齢交流というのが大事だというあたりも、ぜひ、わかっただけのように働きかけるといいかなというふうに思います。

他にいかがでしょうか。

○星山委員 3点お話しします。私は特別支援が専門なので、正答数のグラフを見ると、やはり0問から3問のお子さんの分布のところがとても気になります。

それで、全国平均とか東京都の平均と比べると、どうしても個の伸びというのが見えにくくなるわけですが、八王子も本当にいろいろな地域があって、それぞれの学校が頑張っていらっしゃると思います。回ってみると、よくわかります。もともと、正答率が低いお子さんもいらっしゃるような学校というのは、そのお子さんや学校の先生だけの責任ではなく、いろいろな地域の事情もあるということで、そこで頑張ったところの伸びが、先生方にもよく返るようなアセスメントの仕方というのも考えていったほうがいいのではないかと思います。

もちろん、この0問から3問くらいしか答えられないという子どもたちの層は、丁寧に支援すれば伸びる可能性が多く含まれているので、この子どもたちがもう少しグラフの右側のほうに寄っていくということも、それから真ん中くらいの層の子どもたちが、もっと右側、ほとんど全問正解という子どもたちの層のところに伸びていくような、学校ごとにどういうふうに伸びていくかというようなアセスメントというのができると、先生方もやりがいがあるのではないかなと思います。いつも、平均よりこれだけ低いです、高いですというと、それでは前後の比較ができないので、教えている側とすると非常に報われない面があるのではないかなと思って、教員

に、この学力調査をどうやって返すか、どうやって励みにするかという視点でお話をさせていただきました。

今の視点で言うと、やはりB問題を解けない、正答数0問の子どもが急増するわけです。ということは、やはり普通の授業も余りわかっていないのではないかと思います。ということもありますので、この辺の子どもたちをどうやって支援するかというのは、一つ大きいポイントではないかと思えます。

2点目ですが、これは先生方に対する御指導に対してのお願いなのですが、研修に関しまして、教え方のところですね。私は、もともとは指導法が専門なのですが、興水委員がおっしゃったような、自主的に自分で考える力をつけるアクティブラーニング、それからいろいろな子どもたちと教え合う協働学習、自ら課題を考え自分で解決しようとしていく問題解決の能力というのも、文部科学省が今盛んに言っているところですが、やはり教員もいろいろな世代の方がいらっちゃって、私を含め、昔教員の養成校を出たような方は、画一的なやり方のパターンのようなものがあるので、いや、これからの時代は違うんだということを相当強調していただいて、研修のかけ方などを変えていかなければいけないと思うんです、お互いに。

だから、こういうところも、ぜひ先生御自身に経験していただいて、子どもたちにそれをやっていっていただくというような研修のかけ方をしていただくと、大変ありがたいと思えました。

3点目ですが、いつも出していただく資料に比べてと言ったら申し訳ないのですが、今年のもはとてもすばらしいと思えました。すごく八王子らしさといえますか、特に、小中一貫や地域運営学校も、とても効果があるという勇気づけられる結果を出していただいて、大変ありがたかったと思います。

先ほどから出ているように、なお一層、学力向上というのは先生任せではだめなのだ。私たち一人ひとりが地域力となって、チーム学校として子どもたちを支えていく。もちろん、学力向上だけではないけれども、でも、ここはやはり一つの結果として、すごく効果があるんだということを言っていただきますと、応援している地域、あるいはほかの課の方たちも、すごくやる気が出るのではないかなと思えました。

具体的に、これからぜひやってほしいなというところは、親子同士でほかの親子と学び合うというようなことをやったり、それから盛んに出ています、異年齢で学

び合うということをやったり、せっかく小中一貫にしたのだったら、小学校と中学校で一緒に子どもたちがグループを組んで学び合ったり、実はこれは違う区でやっています。私も教えに行ったりしていますが、コミュニケーション能力を育てるとか、教え合う、学び合うというところで、すごく育つ力があるので、これが今まさに教育の課題となっているところを解決できる、そういう力を含んでいるところではないかなと思います。なので、せっかく出させていただきましたので、ぜひ、今後もこここのところを推進していきますというふうに方向性を打ち出していただけると、応援しがいがあって、大変ありがたいと思いました。

以上です。

○上野指導課指導主事 星山委員の御意見、ありがとうございました。

まず、1点目の特別支援教育、またグラフの中ほどのお子さんのところについてですが、私たちも、そのあたりを大変危惧しております。文部科学省のほうから正答率がパーセントで出ておりまして、それ以外の選択肢をどれくらいのお子さんが選択をしているかというところが出ています。例えば、1番が正解の問題で、正答率が60%で60人正解しているという場合、残り40%がどういう反応をしているかというのが全小中学校ごとに出ています。例えば校内研修で私が伺ったときには、できている子以外のお子さんにどういう支援をしなければいけないのかというところを、毎回お話をさせていただいており、指導主事が校内研修で伺うと、そのあたり、個に応じた支援というところを踏まえて、学校のほうにお話をさせていただいております。

2点目の、先生方への指導についてですが、ここはやはり重要だと考えております。模範になる教員が本市にも数名おりますので、例えば私が担当した研修ですと、中学校の習熟度別指導研修、英語と数学なのですが、協働学習、アクティブラーニングも踏まえての問題解決学習、そういう授業を取り扱っている先生を授業者として、全校の中学校で、数学科と英語科の教員を1校一人ずつ、必ず悉皆で出してくださいという形で全校に広めるような研修を、ただいま行っております。

最後の、地域の連携についてですが、やはり親子のかかわりは大切だと思います。今回の資料に掲載はしていないのですが、実は、保護者が学校の行事に参加するかどうかという項目がございまして、保護者が学校行事に出るか出ないかによって、子どもの正答率が30ポイントくらい変わるというところもあります。学校の指導

だけではなく、地域、または親子、家庭のかかわりというのは、やはり子どもの心情面も含め、学力も踏まえて重要なのかなということが今回の調査でわかりましたので、そのあたりを、今後学校や御家庭にも啓発していきたいと考えております。

○坂倉教育長　　今日はいいけれど、そういうデータがせつかくあるのなら、学校に返すときにはぜひつけてあげないと。各学校で、例えば土曜日の道徳の公開講座なんかを、親御さんが帰らないように低学年を2時間目に、高学年を4時間目にやって、真ん中に講演会をしたりして、一生懸命苦労してやっているのだけれど、それでも来てほしい親御さんが来ないで、いつも来る親御さんしか来ないみたいなことがあるから、ぜひ、返すときにはその辺のところを返してあげてほしいと思います。

あと、今、校内研修というお話がありましたが、校内研修も余り熱心ではないところが少し見えるので、特に小規模校は、研究指定校に手を挙げないで、校内研修もないとなると、皆さんがつくってくれる研修しかないわけじゃないですか。だから、ぜひ、校内研修あたりは積極的にやるように、その辺も含めてやってほしいと思います。

○和田委員　　毎回申し上げているのですが、学力という点からすると、平均点を出すということは、ひとつ大事なことであって、市内の取組等を考える上で一つの参考にはなるのですが、平均点で学力を比べることの意味、どこまでその平均点だけでもが語れるかというところは、慎重にしていかなければいけないというふうに思っています。

学力の国際比較などを見ると、日本の子どもたちは高いのだけれども、何が欠けているかというのは、御存じのように、一つはその教科が好き、学習についての興味・関心があるかということ。もう一つは、学んでいることが役に立っているという実感を持ちながら学習に取り組んでいるかという点については、日本の子どもたちの学習感というか、学習をする上での大きな問題になっているわけですね。

そういう意味で、学習に対する関心・意欲・態度のところ、グラフの左側にいる、「好き」とか「よくわかる」と回答している子どもたちについては、それはそれで頑張ってもらいたいと思うのですが、右側にいる子どもたちの割合が、30%から40%というような数字が出たり、授業が「よくわからない」と答えている子どもたちが、やはり十何%から20%いるという実態を見ると、授業や学習が好きになるような取組、授業づくりというのが、これから必要になってくるし、何に役立つ

ているかということをごきちんと教えられるような、そういう先生であってほしいと思います。

やはり、まだまだ右側の黒い部分、「当てはまらない」という子どもたちが多いということについては、非常に危惧しているところです。ですから、先ほども回答の中にありましたように、「好きではない」あるいは「わからない」という子どもたちにどういう支援をするかということも、こういう表を見たときに、指導・助言をしていただければと思っています。

それから、これも毎回申し上げているのですが、家庭での学習時間については、学習塾や家庭教師の時間も含めた時間だということを前提に調査をしているわけですよ。ですから、本当に自分が自主的に、主体的に家庭で学習をしているかということとは、また別の話になるんですよ。つまり、家庭での格差の問題が、こういうところの授業時数の問題であるとか、学習時間の問題だとかにかかわっているということもよく考えながら、家庭の中で自分が進んでできるような宿題の出し方というようなものも意識していかないといけない。ここに上がっている数字は、ほとんどが塾の時間なんです。他の統計なんかと比較しても、そういう時間になっているので、それで安心してはいけないし、本来の自分の勉強ができるように、そういう宿題の出し方なんかもぜひ、考えていただきたいと思います。

それで、私も今、学校をずっと回っている中で、行くと必ず「学力はどうか」と聞くのですが、ある校長先生の話の中で、「うちの学校は八王子の平均より低いんです」と、残念そうにおっしゃるのだけれども、実は先日回った学校も、授業を回ってみると、学習スタンダードがとてもよくできている学校に出会うのです。学力は低いだけれども、先生方が板書をきちんと書いて、それを子どもたちが、わかりやすく自分のノートに写しながら書いていく姿であるとか、賛成・反対の意見の発表の仕方であるとか、あるいは子どもたちの発言や説明の仕方が非常に上手にできるような、そういう学習スタンダードをきちんと指導している学校に出会うんです。

ですから、そういう学校に行くと、学力の平均点は低いだけれども、でも、この学校の子どもたちはしっかり学ぶ力がついているなという、そういう印象を持っています。そういう学校もあるということで、やはり学校の授業の仕方、先生方の授業の中身を見ながら、ぜひ指導主事の先生方は御指導していただければと思っています。

います。

その学校の校長先生には、今のような取組をしていれば、必ず学習の能力が高まったり評価が高くなっていくので、これは続けてくださいとお願いをしているのですが、やはりそういうふうに見てあげることも大事なのではないかと考えています。

○上野指導課指導主事 和田委員の御意見、ありがとうございました。

最後に和田委員がおっしゃったことは、私も大変実感しております。学校に伺うと、調査の結果では低い数字が出ていても、先生方の取組は、問題解決型の学習ですとか、主体的な学びを入れている学校が非常にたくさんございます。

授業の学びは、もちろんその指導法も大事ですが、その後どう定着させるかというところも踏まえて、今後、指導課、また他課とも連携して取り組んでいきたいと思えます。

貴重な御意見を、どうもありがとうございました。

○興水委員 細かいことで、一つだけ。

46ページの5番です。「家庭への期待」ということで、これは、おそらく家庭にこういう内容でお配りになるということなのかなと思ったのですが、もしそうであるならば、やはり言葉を一つずつ、きちんと吟味していただきたいというような気がしています。

例えば、47ページの(3)「復習用ノートに書いて覚える」と書いてあります。確かに記憶することも大事です。ただ、授業改善ということを考えたときには、覚えればいいのではなく、復習するのであるならば、学んだことを使ってみるとか、何かそういう方向性ですね。大事なのはわかっています。いわゆる基礎的なことをしっかり記憶する、獲得することの大事さはわかるのですが、授業を変えるとか、学力感を変えんとするならば、言葉はこれでいいのかというふうに思っています。

(4)の「教科書を通読する」。ここには、やはり何のためにというのが要るのではないかと思います。保護者の方にもわかっていただきたい。例えば、明日の授業の箇所を読み、疑問を見つけていくとか、何かそういうアクティブな学びに進むのだよと。今までと同じことを、ただもう一回言うというのではなくて、そういう方向の出るような文言を御検討いただけたらうれしいと思えます。

○上野指導課指導主事 興水委員、どうもありがとうございました。

今、御意見をいただきました46ページの5番ですが、こちらは、今私の手元に

ございます「はちおうじっ子 家庭学習のポイント」という、全御家庭に配布しているリーフレットの中に、その部分がございます。この中身については、また吟味させていただき、またこちらのほうを学校及び家庭に周知するということも検討させていただければと思っております。

どうもありがとうございました。

○興水委員 それでは、ついでにもう一つ。

「読書をする時間をつくる」とあります。これはすごく大事なのですが、できれば、新聞等も含めた活字に触れるというふうなほうがいいのかと思います。意見です。

○坂倉教育長 他にございませんでしょうか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

○坂倉教育長 それでは、全国学力・学習状況調査の結果等については、これまでといたします。

続いて、生涯学習政策課から報告願います。

○井上生涯学習政策課長 それでは、平成27年市政世論調査「家庭教育」の結果について、報告させていただきます。

本件につきましては、今年9月2日に開催されました第10回教育委員会定例会におきまして、速報値の報告をさせていただいております。その後、数字が確定し、10月1日に公表したところでございます。皆様には、冊子の形で配付をさせていただいているかと思えます。

本日は、その確定数値につき、分析結果等も含め、報告をさせていただきます。

それでは、詳細につきまして、塩澤主査から報告いたします。

○塩澤生涯学習政策課主査 それでは、報告事項、平成27年市政世論調査「家庭教育」の結果について、御説明いたします。まず、資料を御覧ください。

本件につきましては、9月2日に開催されました第10回教育委員会定例会において、速報値について報告したところですが、10月1日に調査結果が公表されました。委員の皆様には、冊子として配付したところですが、本日、改めて調査結果の分析内容と、それを踏まえた今後の家庭教育の方向性について、報告させていただきます。

まず、調査実施期間及び調査方法については、資料にあるとおりです。

続きまして、調査結果及びそれぞれの分析内容につきましては、市政世論調査の

冊子を抜粋した資料に基づき、簡単に御説明いたします。

初めに、抜粋版資料の67ページ、問15、家庭の教育力の変化についてです。「低下している」と考えている割合が55.2%と過半数を超え、「向上している」が4.1%です。次ページの68ページにあるように、「低下している」と答えている割合は、女性57.3%、男性53.6%と女性のほうが多く、「向上している」と考えている割合は、男女でさほど違いは見られません。

また、下段のライフステージ別では、「向上している」と考えている割合が、現役で子育てを行っている家族成長前期、これは14ページにありますように、20歳から64歳で一番下の子が小学生の層となりますが、その層で「向上している」と考えている割合が6.7%と、割合が最も高くなっております。

一方、「低下している」と答えたのは、家族成熟期、家族成長後期の順で高くなっており、下の子が高校を卒業した年代の親のほうが、下の子が幼児や小中学生の年代の親よりも、教育力が低下していると強く思っていることがわかります。

続きまして、資料の69ページ、問15-1、家庭の教育力が低下している理由についてです。「しつけや教育の仕方がわからない保護者が増えているから」と考えている割合が50.8%と、過半数を超えています。

次ページの70ページと71ページにありますように、特に50歳代以上で子育てが落ちついた家族成熟期以上の層では、「しつけや教育の仕方がわからない保護者が増えているから」と「しつけや教育を学校や塾に依存する保護者が増えているから」と考えている割合が多いですが、20歳代から40歳代で現役で子育てを行っている家族成長前期と後期の層では、「過保護・過干渉な保護者が増えているから」と考えている割合が多くなっています。

続きまして、資料の72ページ、問16、家庭での子どもとの関わり方で保護者が重視すべきことについてです。「あいさつや言葉づかいなど、社会的マナーを身につけること」と「周りの人に迷惑をかけないなど、基本的な倫理観を身につけること」と考えている割合が5割を超えております。

次ページの73ページにあるように、この質問では特に「早寝・早起き・朝ごはん」など、規則正しい生活習慣を身につけること」と考えている女性の割合が、男性に比べて10ポイントも高くなっております。その一方で、「あいさつや言葉づかいなど、社会的マナーを身につけること」と考えている割合は、男性のほうが

高くなっており、性別による考えの違いが表れております。

また、74ページにあるように、ライフステージ別では、「親子で過ごす時間を十分にとること」と考えている割合が、家族形成期で高いことが特徴的な傾向として見てとれます。

続きまして、資料の75ページ、問17、家庭の教育力を向上させるために必要なことについてです。「保護者自身の学習」と答えている割合が5割を超えており、他の項目と比較して突出して高くなっております。

76ページの性別・年齢別では、「友人、知人などの身近な相談相手」や「勤務時間の短縮や休暇の増加」と考えている割合が、20歳代、30歳代で比較的多くなっており、身近な相談相手の必要性やワークライフバランスの考えが、若手に浸透している傾向があります。

また、77ページのライフステージ別では、「保護者自身の学習が必要」と回答した独身期が56.3%と高いことから、自分が保護者になったときに、自身の学習の重要性を今から感じていることがわかります。

続きまして、78ページ、問18、家庭教育について学習をした経験についてです。家庭教育の学習経験のない人の割合が60.4%を占めており、学習経験がある人の30.4%の2倍近くとなっております。

79ページの、性別・年齢別を見てもみると、20歳代の方は家庭教育の学習経験がない人の割合が高く、一方、30歳代の方は学習経験がある人の割合が一気に増えております。また、下段にありますライフステージ別では、現役で子育てを行っている家族成長前期の層では、学習経験が「ある」が51.2%と、全ての層の中で唯一過半数を超えております。現役の子育て世代は、家庭教育に関する何らかの学びを行っている人が半数以上いることがわかります。

続きまして、80ページ、問18-1、家庭教育について学習したことの内容についてです。「子どもの心理・性格形成・しつけ方」と答えている割合が64.2%となっており、次いで「子どもに対する保護者の関わり方」が55.6%となっております。

81ページの性別・年齢別では、学習した内容にかかわらず、全ての年代で割合が均衡しております。その中でも「子どもを取り巻く社会環境」と「家庭の教育的機能・家族の人間関係」の項目では、30歳代がほかの年齢より少なくなっている

ことが伺えます。

また、82ページにありますように、ライフステージ別では、現役で子育てを行っている家族形成期と家族成長前期の層では、「子どもの健康・身体的発育」と回答している割合が5割を超えている一方で、「子どもを取り巻く社会環境」の項目ではほかの層より割合が少なくなっており、現役の子育て世代の悩みが見てとれる結果となっております。

続きまして、83ページです。問19、家庭教育について学習する方法についてです。「家庭教育に関する学級・講座・講演などから」と答えている割合が32.5%となっており、次いで「友人・サークルなどの身近な経験者などから」が27.5%となっております。

84ページの性別・年齢別を見ますと、「家庭教育に関する学級・講座・講演などから」と答えたのが、50歳代以上の人が多く、「友人・サークルなどの身近な経験者などから」、また「両親や年配者から」と答えたのは20歳代、30歳代が多くなっております。

また、85ページにありますようにライフステージ別では、独身期と家族形成期の層において、「友人・サークルなどの身近な経験者などから」と「両親や年配者から」と考えている割合が、他の層より高くなっております。

調査結果については以上になります。

最後に、今後の方向性についてです。

今回の調査では、家庭での教育力が低下しているとの回答が大半を占めておりました。しかし、年代別の傾向を見ますと、現在子育て中の年代と、既に子育てが終わっている年代、子育ての経験がない年代とでは、その評価に若干違いがあることが見てとれました。今回の調査結果のみでは、家庭教育の方策についてすぐに結論を出すことは難しいですが、傾向や対策について何らかのヒントが得られる結果でありました。

市といたしましては、現在、学校教育部、子ども家庭部、生涯学習スポーツ部の3部により、定期的な打ち合わせを行っておりますので、家庭の教育力の向上を図るため、市全体で多角的な視点による家庭教育支援に取り組むことができるよう検討してまいります。

説明は以上となります。

○坂倉教育長　　ただいま、平成27年市政世論調査「家庭教育」の結果についての報告は終わりました。

本件について、御質疑等はありませんでしょうか。

○星山委員　　前々から調査していただいて、とてもよく実態がわかると思います。

一番危惧するところというのが、いわゆる子育てをされていて、特に義務教育が終わるところくらいまでのお子さんを育てている親御さんの意識と、それを見ているもっと違う年齢の方、この調査は特に女性の高齢の方たちが割とパーセンテージが高いので、そういう方たちがどう見ているかというのが、とてもよくわかる調査だったと思いますが、結果を見ると、子育て世代に対して総じて厳しいなど。でも、子育て世代は、もう精いっぱいやっているんだなということが、大変透けて見える結果だったと思います。

それを前提に、やはり私たちが何をしていかなければいけないかという具体的な方略を考えていかなければいけないと思うのですが、しつけの仕方とか教育の仕方がわからないからというようなお話はよく出てくるんですけども、私たちがよく話しているように、子どもの発達は変わってきたわけですね。私は、たまたま専門ですが、とにかく今、支援の必要なお子さんは1割いっているわけですから、やはり子どもたちの脳神経系の発達も変わってきた。

そして、子育て環境がとにかく大きく変わりました。だから、私たちの親世代の子育て環境と、今の若いお父様やお母様が子育てをしている環境が、全然違うんだということをまず理解した上でお互いに考えていかないと、対立や批判になってしまうのだろうなということがあります。それを解消するために、どうしてもお互いに学び合う場づくりが必要だろうと、私は思っています。

ですから、子育てしている親だけが頑張っただけで学ばばいいのではなくて、やはり地域全体で学び合って支えていくという、そういうシステムをどうしてもつくっていかないと、この問題はなかなか解決しないし、本当に応援するということができないと思いました。

私が専門で勉強をしていることで、これは欧米の例ですが、子ども中心主義、子どものためにみんなで頑張ろうと。これはチャイルドセンタードというのですが、日本は家庭がある程度機能していたので、子どものためにみんなで頑張れ、頑張れとやってきてしまった時代が、とても長くあったのだと思うのです。それが機能し

ている時代はよかったけれども、今、その親を支えてくれる家庭という機能が低下してきているので、親が孤立し始めた。

となると、どういうモデルに変えなければいけないかという、家庭中心主義、ファミリーセンタードとあって、家族、家庭を支えると。子育てしているお父さん、お母さんも地域が応援していくんだ、というモデルに変えていかないと、あそここのしつけが悪い、ここの教育が悪いと批判しているだけでは、なかなか難しいということに、世界中が変わってきたんですよね。

ということもあって、日本も、子育てしていない世代の意識を変えていくというのも、生涯学習の教育力かなと思いますので、そのあたりのところをお願いできたらありがたいというふうに思いました。

具体的に、いつも私が考えていることで、お願いしているのですが、特に学校教育から考えますと、親御さんも学年が上がってくると学校にはなかなか来られなくなるので、私はやはり1年生の親御さんというのは、家庭の教育力を支援する大きなチャンスだと思います。特に小学校1年生ですね。例えば年長さんで、次に小学校に上がる時は、みんな親は不安に思いますので、そこでよい家庭教育のプログラムとか、いろいろなことをやっていくというのも、効果があるのではないかと思います。

東京都のいろいろな資料を見ますと、1年生体験プログラムとか、親同士交流プログラムとか、いろいろなことをやっていらっしゃるの、そこも少しヒントとしてはあるなと思います。

もう一つは、先ほどお話ししたように、多世代が交流しないと、親の世代だけではこういう今の事情とか理解というのはなかなか難しいので、この辺のところは、子ども家庭部だとか、ほかの部との連携になってくると思います。もっと言ったら、赤ちゃんを授かる前後の親教育もそうだし、それから地域で子どもたちをどう見守るかという御高齢の方たちに対するいろいろなプログラムもそうかもしれませんが、いろいろなところが連携して、どうしたらどの世代もまざり合って子どもを支えるという家庭教育支援ができるかというところが、これから問われていくところかなと思います。

少し感想も入りましたけれども、以上です。

○井上生涯学習政策課長 御指摘ありがとうございます。

今、星山委員が言われました、特に小学校1年生の親御さんの支援につきましては、今年度からF i k a キャラバンのほうで、足がかり的な取組でございますが、小学校1年生の親御さん、あるいは来年1年生に上がる親御さんを対象とした教育支援、相談等を始めたところでございます。

まだ、一度しか開いておりませんが、また11月に2回目を実施いたしますので、その辺の親御さんの御意見等を踏まえ、今後はそういったところで子育てが終わった年代とどのように交流していくか、そういった取組が必要になってくるかと思っております。

子育てが終わった世代の方が、現在子育て中の方に厳しい視線があるというところは、過去の自分と比較してしまって、現在子育て中の親御さんの悩みであるとか、不安であるとか、そういった現状を知らないのではないかというような考えを我々は持っております。

ですから、市としては、今、星山委員が言われた、いろいろな世代の方が交流して、お互いの考え方や悩みを知ることが、取組としてまず初めに必要ではないかと考えておりますので、そういった場の提供をどのように今後進めていけるのか、これはほかの部とも協力しながら、積極的に進めていきたいと考えております。

以上でございます。

○坂倉教育長 他にございませんでしょうか。

○興水委員 ちょっと時間があってラジオなんかをつけていますと、ラジオ子育て相談とか、教育相談というのを、いろいろな局でいろいろなパーソナリティを使ってやっているのを耳にしたり、目にしたりします。

だから、テレビやラジオで学ぶ方もたくさんいるのかなと思ってこの結果を見ましたら、割と少ないですね。御年配といいますか、私くらいの世代になると、時間があるのでそういうもので勉強をしていらっしゃる方もいると思うのですが、そう考えると、本当に必要性を感じているというか、このライフステージ区分で言うと、家族形成期であったり、それから家族成長前期であったり、ここら辺の方々が一番手取りやすくて、そして時間がない中、忙しい中でも見られるということで、インターネットというのはいいのではないかなと思いました。ただ、この分析では、上位6位というふうに定義づけされていますので、インターネットをライフステージで考えたときにどうなのかというのを知りたいと思ったのです。

なぜかという、それを施策に生かせないかなと思うのです。スマホでちょっとした検索ができるとか、インターネットを通じて、夜中でも、子どもがぐずり出したときでも、いつでも、何かちょっと相談ができるようなもの。フェイスブックとか、そういうものも市役所はお持ちですが、何かそんなものを使っての相談というのもできるのではないかなと。数字は、なかなかそれが使えない年代の人たちが多数を占めていますから、6位までにはきっと入らなかったのでしょうけれども、そんな気がしています。

これからの人たちのツールを活用するような施策を考えていくことも、効果があればいいなと思ってお話をいたしました。

以上です。

○井上生涯学習政策課長 資料にありますように、家庭教育について学習する方法で、インターネットは15.4%ということで、現在まだ8位でございますが、多分これからのインターネットの世界というのは、高齢者の方も使いやすいような仕組みというか、今までは若者が中心に使っていたと思うのですが、これからの日本は、特に高齢者の方もそういったインターネットに触れていただくというような方向になっていくのではないかと考えております。

そういう中で、今、興水委員が言われましたように、インターネットを通じた相談、例えばインターネットを通じて子育てに悩んでいる若い親御さんが、もう子育てが終わったベテランの親御さんに相談というか、話ができるというような、そういったような取組が、今も多分可能だとは思いますが、市としてはまだそういった取組をしておりませんので、これからインターネットをどのように活用していくのかというのは、やはり重要なことだと考えております。

インターネットを所管している課に限らず、先行自治体等の例も踏まえ、そういった活用の方法について検討していきたいと考えております。

○坂倉教育長 9月に速報値の報告を終えたときに、星山委員と金山委員のほうから、ぜひクロス集計を見たいというようなお話があって、ここで出たわけです。

今、簡単にまとめると、星山委員がおっしゃったように、現に子育てにどっぷりつかっている世代は、時間がない中で講座に行ったり、ママ友と話したりしながらいろいろとやっているのだけれど、なかなか時間も無いし厳しいと。それを見ている、特にもう一つ上の世代の方々が、最近の親は教養がないじゃないかというよう

な感じになっていると。子育て世代の中でも、自分たちを見たときに、少し過保護が多いのではないかというような結果が出てきているわけですね。

あと、女性はどちらかというところ、しつけとか早寝・早起きとか、自主性みたいなものを求めているように感じるのだけれども、男性はどちらかというところ、あいさつとか、そういう外から見た感じの人間形成といったものを求めているような形があって、それはそれで、先ほどあったように、ある程度古い時代の子育て感とかが今も入ると思うのです。ちょっと感じたのは、もちろん子ども家庭部とか、生涯学習全体で考えなければいけないのだけれども、学校教育が何ができるか、家庭教育で何が重要かといったときに、学校行事や何かに参加するといったことは、とても低いんですかね。

先ほどの話ではないけれども、現に小学生、中学生のお子さんを持っている人も来ないというのは、そこが役に立たないと思っているのだと思うのだけれども、そんなことは決してないのだと思うので、地域運営学校についてもそうだし、学校支援地域本部もそうだけれども、そういうところが子育て相談や何かの受け皿に十分なるというあたりを、もっと強く出していく形。それは学校教育自体ではないから学校とは分けてあげなければいけないのだけれども、そんな思いもあって、地域運営学校とか、そういうところができることかなと思っているので、これから3部が考えてやっていくのだろうけれども、学校教育部でできることとして、そのあたりをぜひやっていきたいと。

その延長が、いつも私が校長会などで言っている、3時までが皆さんの仕事ではないのですよということ。本来的には仕事なのだろうけれども、全体的に見ていくのですよ、なおかつ、地域の力を借りてくださいという形があるのだけれど、その辺は前の問題とも絡むのだけれど、今、もう家庭の力は弱くなってしまっているからと言いながら、学校とは少し別の切り口になっているのかなという気がするから、ぜひ、その辺のところを一体的にやることを考えていきたいということを思いました。

○和田委員　この調査を見ていると、あいさつをしなければいけないとか、迷惑をかけるはいけない、あるいは早寝・早起きというように、やはり子どもたちは年齢が上がるに従って、どんどん家庭や親から離れていくような内容になっていくのだなというふうに思います。

社会に出たときには、あいさつの仕方だとか、いろいろな接遇の問題にしても、

身についていく部分があるわけで、家庭教育で一番大事なことというのは、やはり親ときちんと話ができたり、困ったときに自分の考え方を親と話すような、そういう時間がきちんとしていて、家庭が一つの行動やあるいは道徳性の基盤になっているということを自覚させることなのだろうなというふうに思っています。なので、保護者の方が、あいさつをしなければいけない、何をしなければいけないという、そういうことに余りとらわれないでほしいと思うのです。

その意味からすると、家庭の子どもを育てるときに、手を離すな、目を離すな、心を離すなという、そういう成長段階にあわせた言い方をよくしますが、そういう点からすると、やはりこの家庭の教育力を高めるには、先ほど教育長が言われたように、学校や地域の行事に参加して、子どもの姿を見てもらいたいという思いがします。

そういう中で、どっしりと構えて子どもの相談相手になれるような、そういう家庭であってほしいというふうに、感想ですが思いました。

○村松委員　先ほどの、全国学力調査のほうの資料40ページに、小学生に「自分には、よいところがあると思いますか」と聞いている部分があるのですが、去年よりみんな自信がなくなってしまうんですね。中学生が若干上がっていますが。「将来の夢や目標を持っていますか」、これも下がっているんですね。こちらは中学生も下がっています。

しつけや教育の仕方がわからない保護者が増えている。これは、核家族ですとか、親が孤立しているという、PTAのほうでもそうなのですが、少しでも子どもの教育やしつけに興味がある、やっていかなければいけないという親御さんたちは、積極的に出てきてくださるのですが、そうでない方は、どんなアプローチをしても出てきてくださらない。

だから、保護者の方たちにアプローチをして、こういう教育力の低下という問題を、本当に考えていかなければいけないというのを、市のほうからでも、こんな大変なことになっているんですよと、もう少し強烈にアピールしたほうがいいのではないかと考えています。

「将来の夢や目標を持っていますか」というところがだんだん下がっていくなんて、こんなことはちょっと考えられないので、子どもたちに、もう少し将来のことを真剣に話す機会を持っていただきたいと思っているんです。

先日、ある御家族とお話をしたんです。お母さんと小学校1年生のお子さんがいらっしゃって、そういえば、最近お父さんは帰ってきていないのと言うと、「お父さんは月曜日から日曜日まで帰ってこない」と言うんですね。ということは、お父さんが家にいないんですよ、仕事で海外に出張に行ったりして。お母さんも仕事をされているので、なかなか食事を一緒にとる時間もない。そんなことで、家族のしつけとか、大事なお父さんとの話し合いとか、そういうことができないというのは、これは本当に今の時代を表しているなと思うのです。

でも、やはり子どもの時代はそのときしかないので、教育委員会も、大人に対してもう少し強めでもいいですから、アプローチですね。教育状況は本当に大変になっていると。このままでは、お子さんたちも立ち行かなくなってしまうよと。夢も希望も持てないような、そういうことになっていると。皆さん、もっとちゃんとやりましょうということを、もっと言っていけないと、わからない親御さんは本当にわからないので、先ほどのF i k aキャラバンもそうなのですが、その辺の状況を踏まえて、保護者にもっとアプローチをしていきたいと思っているのですが、このF i k aキャラバンの他にも、こういうアプローチの仕方をしていこうということで、何か考えていらっしゃることがあるのでしょうか。

○井上生涯学習政策課長 「八王子市の家庭教育8か条」のチラシを各家庭に配布しているのですが、今考えているのは、それとは別に、家庭教育の必要性であるとか、これはF i k aキャラバンの保護者の御意見等も検討した中になりますけれども、全家庭に配布できるようなチラシをつくらうと考えております。

そういう中で、現状であるとか、家庭教育の必要性というものを、どのようにアピールできるのかというのは、まだ具体的な内容までは思い当たらないのですが、F i k aキャラバンに来られる親御さんの、実際に悩んでいる御意見等も踏まえた中で、早急にそういったチラシを全家庭に配布していきたいと思っております。

○坂倉教育長 社会教育から生涯学習の時代になって、どちらかというところ、国家なり自治体が各家庭に強制的に指導をしていくという時代ではなくなってきたので、これも家庭の教育力という言い方をしていますが、どちらかというところ支援だと思っております。その支援の一貫の中で、例えばスマホの使い方なども含めて、今言われたような、本当に御自身たちも悩んでいるところがあるでしょうから、そうした家庭教育8か条に代わるというか、その続編みたいなものを、今、子ども家庭部、生涯学

習スポーツ部、学校教育部が連携して、流していければいいかなと思っているところでは。

○星山委員 単なる思いつきなのですが、先ほどの学力向上と、この家庭教育もですが、私はいつも思っているのですけれども、「今日あったことを子どもから楽しそうに聞く」とかというほうが、具体的でわかりやすいのではないかと思います。

コミュニケーションがとにかく不足しているので、楽しそうに子どもに、「今日あったことは何」と聞くとか、あとは、勉強も、自分が教えたりわからなくてもいいから、子どもに、今日した勉強をおもしろそうに説明してもらって、その聞き役をするとか、何かそんなものを入れていただけたら、やってくれる人が増えるかなと思います。

どうしても、批判したり、やらせようとなさる方がまだ多いのですが、子どもたちが求めているのはそういうことではないのにと、よく感じるので、8か条もいいと思うのですが、もう少し具体的に、これというのを今度は打ち出していただけるといいのではないかと思います。

○坂倉教育長 表彰式や連合行事に行くたびに、子どもには、自己ベストをめざして一生懸命頑張っただけと。親御さんには、今日あったことを必ずたくさん話して、それからたくさんほめてあげてくださいという言い方をされていて、その日帰って一緒に食事をとれるかどうかはわからないところがあったりして、なかなか難しいのですが、多少、ものによっては守ってもらいたいというような書き方もあると思いますけれども、一般的にはそのような、まさに支援、投げかけという形になってくるのかなと思っていますので、そこも含めて検討していきたいと思っています。

○興水委員 星山委員のほうから、やはり就学直前のところはすごく大きなポイントですよというようなお話がありました。学校では、4月の学校説明会とか、就学時健診、またはそのときの説明会を必ず持たれると思うのですね。

チラシは、本当にお金もかかるし、手間もかかるのですが、配られたらそのままというところも多いので、できれば手渡しが一番いいけれども、なかなかそうはいきませんので、そういう全員というか、特に就学時の場合は、お集まりになる場はこちらから出向いて行って、これをするのがこんな力になるんですよということを、お母さん方にダイレクトにお示しできるような、そんな企画もいいのかと思います。

先ほど、インターネットなど、媒体を通じてと言いましたが、そういう媒体を通じての場合と、ダイレクトにということの両方を考えていかなければ、なかなか浸透はしないだろうなど。これも思いつきで申しわけありません。何かしらお手伝いできることがあれば、私どもも考えたいと思います。

○井上生涯学習政策課長 学校教育部と今、検討を進めておりますので、その中でも議題にしてみたいと思います。

○坂倉教育長 平成27年市政世論調査「家庭教育」の結果についての報告及び質疑は、以上にしたいと思います。

他に何か報告する事項等がございますでしょうか。

○廣瀬学校教育部長 文化財課より報告がございます。

○坂倉教育長 それでは、文化財課からお願いします。

○中正文化財課長 本日、皆様の机の上に青いチラシをお配りさせていただきました。

郷土資料館では、平成27年11月1日から12月6日まで、コーナー展「八王子と鉄道」を開催いたします。

この「八王子と鉄道」展につきましては、平成23年にも国鉄・JR編と、私鉄編を開催し、大変好評でございました。

今回は、前回公開できなかった館蔵の資料、「絵葉書 浅川駅」とありますが、このようなものや、市内在住の鉄道資料収集家の收藏品、この濃い青色の部分でございしますが、このようなものを中心に展示いたします。

また、チラシの右上にございますが、平成23年の特別展の際に刊行いたしました図録、こちらが完売以来品切れの状態が続いておりましたが、今回のコーナー展にあわせて再販いたします。

イベントの多い時期ではございますが、ぜひ、お立ち寄りいただければと思います。

報告は以上です。

○坂倉教育長 文化財課からの説明は終わりました。本件について、御質疑はございませんでしょうか。

「八王子と鉄道」の再販はいいと思うのだけど、ほかに、例えばこの絵はがきの復刻版の再販売なんかはできないものなのですか。どのくらい需要があるかわからないのだけれども。鉄道ファンは、みんな結構熱心だから、その辺のところはどう

なのでしょうか。

○中正文化財課長　　これまで検討したことはございませんが、そのようなグッズの販売は行っていないのですが、何かできるものはないか、検討してみたいと思います。

○坂倉教育長　　東京富士美術館なんかでも、毎回何らかのグッズがあつて、富嶽36景などがあると、私もマグネットを2つ買ってしまったのですが、ぜひ、見せるだけではなく、お土産を買えるような、その辺もお願いしたいと思います。

よろしいでしょうか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

○坂倉教育長　　これで公開の案件は終わりますが、委員の方から何かございますでしょうか。

○和田委員　　教育長職務代理として、東京都の市町村教育委員会連合会の会長として、先週の10月22日、23日、青森で開かれた全国の連合会の常任理事会のほうに参加をしてみました。

その中で、まず、行政報告が行われ、文部科学省の初等中等教育局財務課教育財政室長の丸山洋司さんという方からお話をいただいたわけですが、前日の10月21日に八王子の大和田小学校と第二小学校の校舎を見に行ったということで、ちょっと話が盛り上がりまして、校舎の老朽化が進んでいる中で、国はどのような対応をしていったらいいのだろうかというような話も出ました。

その中で、丸山さんが強く言っていたのは、来年度の予算編成に向けて、財務省は、やはり教員の定数削減を強く求めている、これについては、首長を初めとして各教育委員会が声を大きくしていかないと、どんどんこれから教員の定数が削減されていくので、ぜひ協力してもらいたいという話が出ました。

今までのように、定数として定められているもの、それからいじめ等の、あるいは不登校加配になっている、そういう教員の加配も含めて、全てをひっくるめて一律に削減をする方向で財務省が動いているので、これは大変教育に対しては重要な問題であるというようなことで、ぜひ、市町村の教育委員会のほうからも、また、市町村を初めとして首長のほうからも、強くこの点については意見を言ってもらいたいというお話がありました。

それから、小中一貫教育にかかわって、今、義務教育学校という形になっているわけですが、市町村については、その9年間をどういうふうに割っていくのか。例

えば、4年・5年というような学制にするかとか、いろいろ取り組まれているのだけれども、これから文部科学省のほうでは、どういう区切りができるのか。要するに、教育課程がかなりがっちりできているので、それを踏まえながら、どういうふうに学制を区切っていくのかについて、今後方向性を示し、各市町村の教育委員会がそれを判断できるような材料を提供していきたいという話がありました。

それから、教育委員会の連合会の質疑、やりとりの中では、やはりどの教育委員会も、新教育委員会制度への移行について非常に関心を持っていました。まだまだ旧教育委員会制度の中で動いている地域があるわけなのですが、新教育長の役割と、それから教育委員の役割について、どう考えていくのかということ。例えば、5人いた教育委員が、今度は実質的に4人に減っている状況がありますので、そういったときに教育委員会が果たすべき役割というのは、今までと同じような立場でいいのかというようなことと、それから教育委員の4名が協議会のような形を持ちながら、教育委員としての考え方を共有するような、そういう場面も考えていく必要があるのではないかというような、そういう話もありました。

さらに、新教育長制度の中では、教育長がかなりリーダーシップを発揮するのだけれども、しかし、教育委員会そのものは合議制をとっているわけで、その合議制の中で新教育長の発言や行政に対する考え方について、どのように教育委員は発言をし、合議制のよさを生かしていくのかというあたりを、ぜひこれから検討してもらえないかという話も出ていました。

また、教育長職務代理者として私が出たわけですが、新教育長のもとの職務代理者とはどういう役割を果たすのかということについては、やはり議論になりました。そういう名称で果たしていいのだろうか。教育長の補佐をすることには変わりはないのだけれども、そういう名称ではなくて、別の言い方をしていかないと、教育委員会の中での教育委員を代表するような、そういう位置づけにならないのではないかというような議論もありました。

今後の連合会の考え方もいろいろ議論され、今は教育長と教育委員長と教育委員が一緒になって連合会を形成しているのですが、この新教育委員会制度が進んでいけば、教育長と教育委員という形になってきて、では、教育長が連合会に参加して発言をしたことと、それから教育委員がその連合会の中で発言したことを、どう調製していくのか。そういうあたりが、非常に課題だなという話になりました。

中には、教育長と委員の代表の2名がこの連合会に参加して、同等の立場で意見を言ったらどうかというところもありましたし、全国の都道府県の中から半数が教育長から出て、半数が教育委員から出るような区分けをして連合会に出席してはどうかというようなことも出てまいりました。

教育長は教育長の連合会がありますので、そこでの連合会の協議内容と、教育委員会連合会の協議内容について精査していかないと、同じようなことをやっていたのでは、やはりその独自性というか、教育委員会連合会の役割というものが不明確になっていくのではないかというような話が、協議の中では出てまいりました。

来年、関東甲信越静の連合会が5月に八王子で開かれるということもありますので、関係の教育長や委員長の方々には御挨拶をして、ぜひ協力していただくようお願いをしてみました。

以上です。

○坂倉教育長 大変お疲れさまでした。また、貴重な情報の御提供をありがとうございます。

特に、来年は関東甲信越静の総会を八王子で行いますので、ぜひ、また和田委員にはよろしくお願ひしたいと思ひますし、事務局もよろしくお願ひしたいと思ひます。

それでは、ここで暫時休憩にいたします。

なお、休憩後は非公開となりますので、傍聴の方は御退出願ひたいと思ひます。

再開は10時55分としたいと思ひます。

〔午前10時44分休憩〕